大阪府立千里高等学校
平成 29 年度 第２回スーパーグローバルハイスクール運営指導委員会〈記録＞

日時:平成30年2月9日　12時20分～13時10分
場所:千里高校　校長室
出席者:

〇運営指導委員

久　　隆浩　委員　近畿大学 総合社会学部環境･まちづくり系専攻　教授
藤本　英子　委員　京都市立芸術大学 美術学部　教授
森田　直樹　委員　吹田市立高野台中学校　校長

〇管理機関･大阪府教育庁

香月　孝治　教育振興室 高等学校課　教務グループ　主任指導主事

〇千里高校

松本　　透　　校長
堀辺　慶一　　教頭
大西　千尋　　首席(SGH 事業推進主担当･英語)
松井　活夫　　教諭(SGH 委員･「探究」･「探究基礎」担当･国語)
村上　晃　　教諭(SGH 委員･「探究」･「探究基礎」担当･社会)
江口　拓馬　　教諭(「探究」担当･国語)
前橋　直子　　教諭(「探究基礎」担当･国語･1年担当)
二井　三喜夫　教諭(「探究」担当･社会)
野村　真理　　教諭(「トピック･スタディズ」担当･英語)
今岡　仁美　　教諭(「探究」担当･英語)

次第:

1，校長挨拶
2，本校の SGH 事業の取組状況報告―別紙資料に基づいて
　　①　前回の助言を受けた動き
　　②　SGH アンケートの設計と結果（一部）
　　③　実践報告会の進め方・資料・参加者
　　④　来年度計画と予算
3，指導助言

資料（Web 公開資料は一部省略＞）

＜資料１＞前回いただいたご助言に沿って取り組み状況をお示しします。
＜資料２＞SGH に関わるアンケートを改善する試みと結果の一部をお示しします。
＜資料３＞実践報告会の概要をお示しします。
＜資料４＞来年度の計画と予算の概要をお示しします。

次年度　第1回運営指導委員会予定　平成30年10月16日(火)　15 時～

平成２９年度第２回ＳＧＨ運営指導委員会（2018/2/9）＜記録＞

委員・管理機関代表からのコメントの要点は次の通り。

1．生徒の発表

・資料をきっちり作る、前を見て発表する、アンケートを自ら行うなど、進展が実感できる。
・テーマが重なっている研究同士はどのように交流しているだろうか。→講座が別であっても交流する機会を作ると刺激しあって生まれてくるものがあるはずだ。

・来年度計画されている卒業生に対する追跡調査は大切だ。逆に、入学希望者の増加につながっているかという点も気になる。

・大きなテーマであっても、解決法を人任せにする（国や企業の責任だ等）のではなく、高校生としてできることを見つけさせるように促すべきだ。

・大学では「テーマ演習」という授業があり、自分たちが立てた問いに合わせて先生を探してくるようになっている。そういう発想があっても良い。

・よく調べていることに感心した。

・自分のタブレットから無線でプロジェクターに送出していたのも印象的だ。

・自分の中で生まれた疑問に対し、自分なりの考え方をしっかり述べられている

・今回はSGHの代表発表だけではなく、科学探求も含めて、色々なタイプの発表を見た。

・農業体験についてのデータは、引用元を明示できていなかったが、中学生で農業体験経験者が増えていると述べていた。中学校では「技術」の授業で栽培を扱うことになっているのが影響しているかもしれない。高校生なりに一次産業の大切さを理解してくれていることがわかった。

・発表に対する質問もよく出ていた。

・生徒の発表の成長は実感できる。例えるなら、立ち姿にオーラが出ている。

2．運営

・SGH予算減について。1)この種の予算は、初期投資が必要との考えから、そもそも年を追い減額していくもの。また2)事業仕分けの対象となったため次年度は総枠が減額された。さらに3)３年目の中間評価の高低によって多少差もつけられた、と見ている。

・４、５年目は成果の発信と普及が求められる。

3．指導方法の効率化

・できるだけ効率的なシステム化（しんどい思いをせずにうまく回すか）が大切。

例えば、

・通常授業に探究の手法を取り込むことで負担感を減らす。
・教材・授業資料の共有データベースの作成。
・教授法の共有、テクニックを学びあう。授業見学はチェックではなく「良い所」を見つけてフィードバックするようにすると、心理的な抵抗が減る。

・クラブと時間の捻出→探究での社会貢献をクラブ活動にするという逆転の発想が可能。尼崎小田高校には地域貢献のクラブがある。

・国連ＳＤＧｓを意識し、課題と各目標との関係を考えるのは大切。近畿大学で朝日新聞の記者に来てもらった。現場に入らないと見えにくく、入って初めて実態が見える。数値データだけでなく実感として諸課題が見えれば、実態が見えて行動が変わる。

4．評価

・評価方法は、体系立ってわかりやすくなってきた。引き続き改良を加えて行って欲しい。

・事前（新入生アンケート）、事後のアセスメントを同じ項目でしてみるとよい→生徒の成長、学びのポイントを把握できる。キッズ大阪のアセスメントでは、自己肯定感や探究力の向上が確認された。アセスメントの項目や質問の仕方については、各大学が実施・公開しているものを参考にできる。

5．その他の項目

・新入生アンケートで、「どの学校と比較検討したのか」、「なぜ・どう千里を選んだのか」、「どこを併願したのか」を尋ねれば、効率的な広報が考えられる。

・社会的インパクトを強化するには、プレスリリースを活用するべき。

・交流校・連携校として台湾はとても良い。日本と共通する面がたくさんあり、溶け込みやすい。

・報告会で大切なのは人数ではない。どの学校も忙しいこの時期に来てくれるのは熱心で元気な先生。だから来てくれた人を大切にすることが重要。

・「自分は何ができるのか」を生徒に考えさせるのなら、SDGs や環境・労働・人権・腐敗防止に関して学校は何ができるのかを考え、実行すべき。

＜資料① 前回の運営指導委員会での主な助言とその後の動き＞

1. 中間発表について

・ビジュアル資料をもっと活用。あれば具体的にイメージできる。

▶生徒への指導を意識して行う。ルーブリックには位置付け。まずは我々の資料から。

・テーマの絞り込みをさせる指導が大事。絞り込むことによって問題に入り込むことができる。

▶指導は意識して行っている。来年は「探究基礎」とのつながりを強化・活用する。

・地元をもっと活用する。児童虐待等は中学でも直面している課題だ。地元に連携が可能な資源がある。

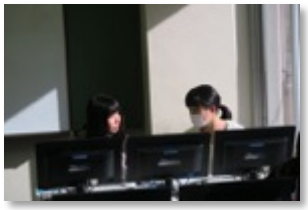
▶市役所や企業とコンタクトを取る生徒が出てきている。

2. SGH 研究開発の効果について

・他の科目の指導法の変化に繋がっているか。

・どのような学習の姿があるだろうか。

▶対話をしながら論理を確かめる／得意分野を補い合う／複数の仮説を分担する姿が見られる。共同研究のメリット。



3. 連携について

・海外の高校との連携については、高・大・民間といろいろなチャンネルがある。

▶来年度の重点課題に。取り組める体制づくりを進める。

4. 「中間評価」について

・評価をする側の目から見たときのポイントは、「エビデンス」と「システム」だ。

「エビデンス」：アンケートの結果＋声のリストアップ

「システム化」：誰と誰が連携し、全体としてどう動いているかを「見える化」する。

▶エビデンス：「声」のリストをアンケート結果とリンクさせる評価へ。

▶システム：「どう動いて欲しいか」を「見える化」。年度始めに共有し、点検する。

5. カリキュラムと教員組織について

・公開することで、チームビルディングを進めることができる。

・カリキュラムポリシーとカリキュラムツリーを「見える化」して共有する。

カリキュラム＝　・ポリシー（教育目標）　←これが第１。

・ツリー（科目体系図）　←科目全体がどう繋がって目標を達成するのか。

▶来年度向けに、探究のテーマを整理。担当者が決まる前に設定することにした。

・これと並行して、大学ではファカルティ・ディベロプメントのシステム化に取り組んでいる。目標と戦略を共有するとともに、人材育成・開発にも組織的に取り組む＝チームビルディングということだ。

▶課題研究の授業研究・アクティブラーニングの授業研究からスタートしたい。

・外部人材の活用も積極的に検討すると良い。忙しい部分をどう外に振っていくか。これにより戦略を練る時間を確保しつつ、今以上の成果が期待できる。大学教員に来てもらうこともできるし、研究室に行くこともできる。「大学コンソーシアム大阪」に依頼することもできる。

▶大学は高大接続に本腰を入れ始めている。うまく活用することで、予算減額への対応・戦略を練る時間の確保・成果の充実につなげたい。

6. その他の助言

・海外研修は、コネクションのある人を活用すれば色々な地域・内容を考えることができる。

・ターゲットが明確にされた研究にするには、テーマの枠をはめることが重要。

・経験と勘を、システムに。

・SGH に取組み、いかに学校の仕組み・授業が変わってきたかが問われている。

・ホワイトボードを使ってテーマを公開することで、他の先生や生徒を巻き込んでいくことができる。ぜひ、運用を開始してもらいたい。

▶まずは SGH 関係掲示板としてホワイトボードの運用を開始した。来年度は目的を明確に使いたい。

大学教員のファカルティディベロップメントについて

〇ファカルティ・ディベロップメント

…教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。

〇ファカルティ・ディベロップメントに関する主な法令上の規定

…「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」（平成 17 年 9 月 5 日中央教育審議会答申）を受けて、大学院設置基準において義務化（平成 19 年 4 月 1 日より施行）。

出典：文部科学省.中央教育審議会 大学分科会 制度部会（第 21 回（第 3 期第 6 回））議事録・配付資料 ［資料 5－1］. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06102415/004.htm

大学コンソーシアム大阪

大学コンソーシアム大阪は、平成 11 年に 31 大学により設立された大阪府内大学学長会を前身とした、大阪府内の 4 年制（6 年制）大学で構成される団体です。平成 19 年 8 月に特定非営利活動法人（NPO 法人）になり、現在 42 の会員を擁して多様な活動を行っています。本法人は、大阪府内およびその周辺の大学の相互連携を深めるとともに、地域社会・産業界・行政と協力しあって、地域社会に貢献し、お互いの連携を強めること、国際交流を進めることを目的としています。その目的達成のために、高大連携、大学間連携、インターンシップ、国際交流、地域連携等の活動を進めています。

大学コンソーシアム大阪. 法人概要 | 大学コンソーシアム大阪. http://www.consortium-osaka.gr.jp/about/

＜資料②　SGH に関するアンケートの設計と結果（一部）＞

1.　設計

改善点１:

可能なものは実施後すぐに選択式および記述式のアンケートを実施。両方の結果を組合せて評価

改善点２:

アンケートをカテゴリーに分類、カテゴリー記号＋番号＋７文字までの名称を付与。

→質問の意図を明確に、表示グラフ中の表示が簡潔に

A.　本校が育成することを目標とする「グローバルマネージメント力」

各目標について、「高校入学前と比べて自分はどのくらい向上したと思いますか？」

各目標について、授業・研修等がどのくらい貢献したと思いますか？」

A.1　高い社会貢献意識

→「社会に貢献しようとする意識が高い。」　◆A1 社会貢献意識

A. 本校が育成することを目標とする「グローバルマネージメント力」

◆A1 社会貢献意識
◆A2 国際課題理解
◆A3 協同探究力
◆A4 創造的提案力
◆A5 英語運用能力

B. その他本校が期待する効果

◆B1 国際課題関心
◆B2 国際課題意欲
◆B3 多角検討認識
◆B4 リサーチ能力
◆B5 レポート能力
◆B6 リアルな理解
◆B7 研修経験波及
◆B8 国際大学希望
◆B9 専攻分野影響
◆B10 知的好奇心
◆B11 進路検討機会

C. SGH 統一のアウトカム指標

◆C11 社会貢献経験
◆C12 自己研鑽経験
◆C13 貢献／研鑽経験
◆C20 留学研修経験
◆C31 留学希望
◆C32 国際活躍希望
◆C33 留学／活躍希望
◆C41 公的表彰経験
◆C42 大会入賞経験
◆C43 表彰入賞経験

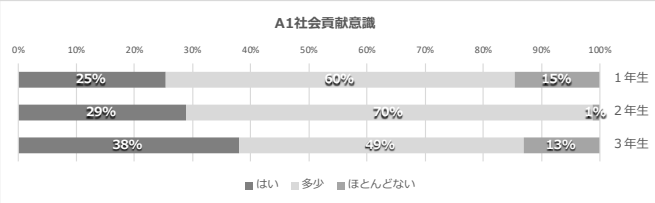
D. 参加満足度

◆D1 参加満足評価
◆D2 成長実感

11. 本校SGHの目標別向上度

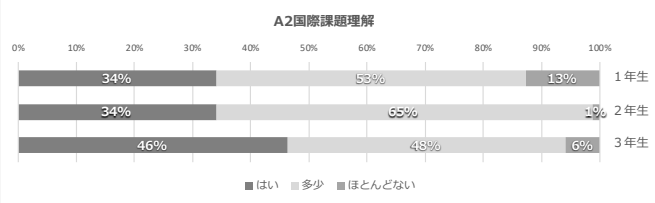
A1社会貢献意識

	回答実数 (n= 1 年生158, 2 年生149, 3 年生153)			有効パーセンテージ		
	はい	多少	ほとんどない	はい	多少	ほとんどない
1 年生	40	95	23	25%	60%	15%
2 年生	43	104	2	29%	70%	1%
3 年生	58	75	20	38%	49%	13%



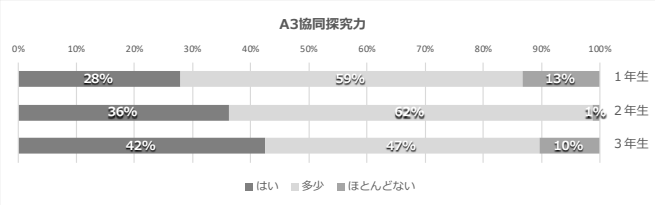
A2国際課題理解

	回答実数 (n= 1 年生158, 2 年生149, 3 年生153)			有効パーセンテージ		
	はい	多少	ほとんどない	はい	多少	ほとんどない
1 年生	54	84	20	34%	53%	13%
2 年生	51	97	2	34%	65%	1%
3 年生	71	73	9	46%	48%	6%



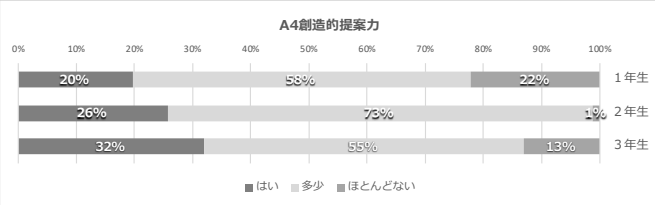
A3協同探究力

	回答実数 (n= 1 年生158, 2 年生149, 3 年生153)			有効パーセンテージ		
	はい	多少	ほとんどない	はい	多少	ほとんどない
1 年生	44	93	21	28%	59%	13%
2 年生	54	93	2	36%	62%	1%
3 年生	65	72	16	42%	47%	10%



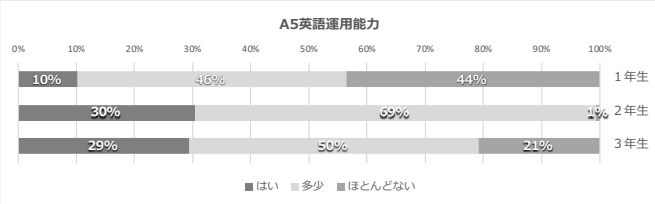
A4創造的提案力

	回答実数 (n= 1 年生158, 2 年生149, 3 年生153)			有効パーセンテージ		
	はい	多少	ほとんどない	はい	多少	ほとんどない
1 年生	31	92	35	20%	58%	22%
2 年生	39	111	2	26%	73%	1%
3 年生	49	84	20	32%	55%	13%



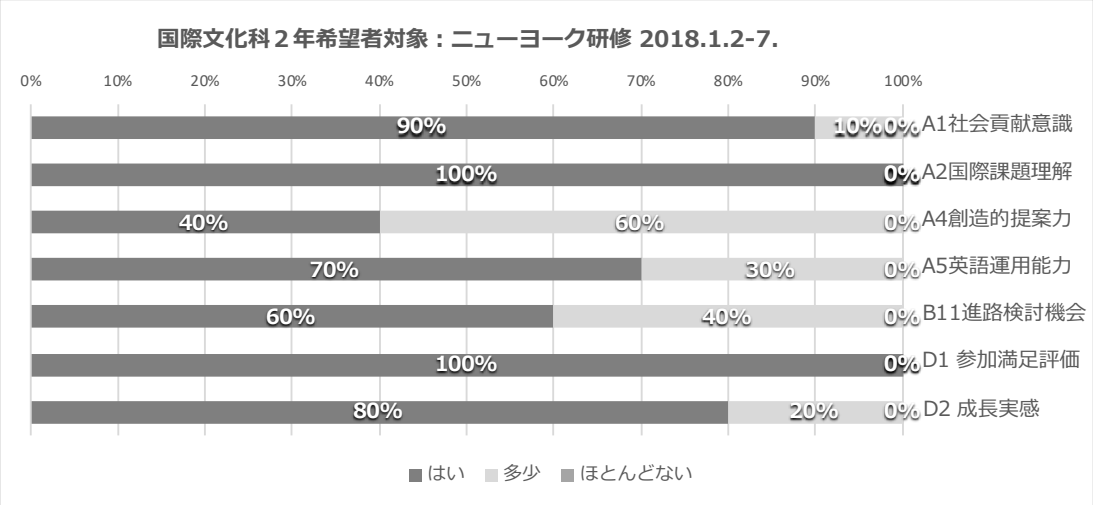
A5英語運用能力

	回答実数 (n= 1 年生158, 2 年生149, 3 年生153)			有効パーセンテージ		
	はい	多少	ほとんどない	はい	多少	ほとんどない
1 年生	16	73	69	10%	46%	44%
2 年生	45	102	1	30%	69%	1%
3 年生	45	76	32	29%	50%	21%



6. 国際文化科２年希望者対象：ニューヨーク研修 2018.1.2-7.

	回答実数 (n=10)			有効パーセンテージ		
	はい	多少	ほとんどない	はい	多少	ほとんどない
A1社会貢献意識	9	1	0	90%	10%	0%
A2国際課題理解	10	0	0	100%	0%	0%
A4創造的提案力	4	6	0	40%	60%	0%
A5英語運用能力	7	3	0	70%	30%	0%
B11進路検討機会	6	4	0	60%	40%	0%
D1 参加満足評価	10	0	0	100%	0%	0%
D2 成長実感	8	2	0	80%	20%	0%



質問: どういう点で学び・気づき・成長がありましたか？
アメリカ人のLGBTあるいは移民に対する考え方がきけた。 日本とアメリカの考え方の差が発見できた。
実際に国連で働いておられた方の話を聞いていくなかで**能動的に動くことの大切さ**を感じた。
たくさんの成功をおさめられてこられた方々に会ってみたら、**沢山の職場で経験を積んでこられてそれを今の職業にいかされてる**方がほとんどだった。
日本は多様性がないと考えていたが、エヴァさんから、日本には日本なりの多様性があり、ニューヨークにはニューヨークの多様性があるということを学んだ。多様性という言葉をひとくくりにすることはできない。それぞれの国が独自の多様性を産み出していることを学んだ。
ニューヨークは、2ブロック進んだだけで、町の景色はもちろん住んでいる人の人種などに変化が見られ、すごく刺激を受けた。**ニューヨークは都会だとひとくくりに考えていたが、**ニューヨークの中でも富の格差があることを知った。
人と違うことは悪いことじゃない。それを認め合えるようになることが大切。 失敗してもいい。**挑戦することが大切**。 周りのペースに流されないでいい。**自分のペースでしっかりと**。
マイクロアグレッション・ ニューヨークでの生活・教育の理想・美術の多様性・**日本の多様性**・**自分がこれからしなければならないこと**。
日本の中のdiversity・人権教育の方法・質問の仕方・ミーティングの意義。
ダイバーシティってアメリカとか移民の多い国に多いと思っていたけど、そんなことはなくて、日本にもあるということ。
いろんな人に会ってたくさん自分の知らないこととか、**こうだと思っていたことがそれがすべてじゃない**ということを学べた。
将来のことを考える機会もたくさんあった。
ミーティングで質問の準備とかしてるときに**良い質問とあまり良くない質問のちがい**を教えてもらったりしたので、この事がとてもこれからに役立つと思う。
自分の力不足も感じた。**英語の聞き取りとか、特に話すことが自分はできてない**と思った。これからもっともっと頑張ろうと思えた。
自信を持つことの大切さ ・**マイペースに進み続ける**こと ・**自分のしたいことを貫く**べきということ ・**同じ目標を持ち一緒に頑張る仲間の大切さ** ・自分の意見を述べるとき、本来言いたいことが伝わらないので簡潔に述べようと思った ・どんなときでもポジティブに考えて楽しめるようになった
Diversityをマーケティングに使うという考え方 多くの人種が世界にあるということが実感できた **積極性の大切さ** 意志の強さが大切
社会問題に貢献したいという意欲が増えた
ダイバーシティに対する理解・社会的少数の意味・**国際的に活躍するためにすべき**こと。

＜資料③　実践報告会の内容･資料･参加者＞

1.　全体会

12:40 SGH 報告会全体会　開始
12:40 (1) 本校の特長と SGH 構想全体像　　校長
12:55 (2) 課題研究　探究基礎と探究　　各担当者
13:10 (3) 課題研究以外の活動　　〃
13:20 (4) 英語のコミュニケーション授業　　〃
13:30 (5) タブレットの運用・活用　　〃

2.　分科会

13:45-14:30
報告 20 分・質疑 10 分・経験交流 15 分

(1) 課題研究　探究基礎と探究
(2) 課題研究以外の活動
(3) 英語コミュニケーション授業
(4) タブレットの運用・活用

3.　資料

・　可能なものは様子のわかる写真を加え、アンケート結果も利用

4.　参加者

・　大阪府立の高校
・　上記以外の高校
・　大学関係者
・　その他教育関係者
・　本校教員

＜資料　　平成 30 年度の SGH 計画・予算について＞

5. 全体 740 万円→580 万円

6. 4 年次計画（3 年次からの追加分）

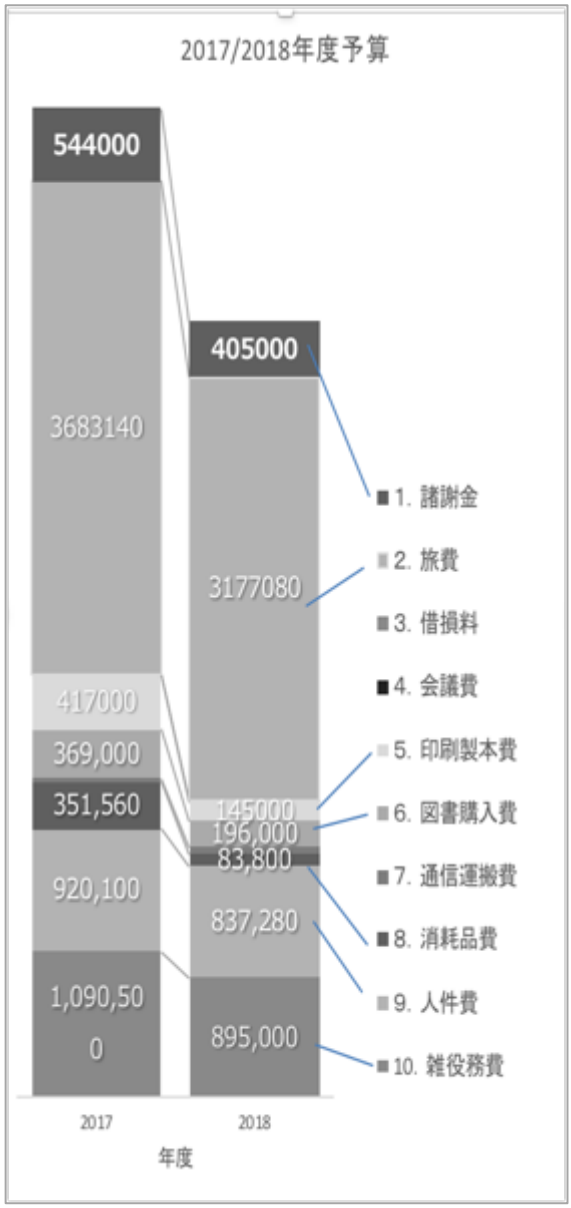
- 追跡調査（大学在学中の留学経験・計画、専攻の選択に課題研究の影響があったか）を追加
- 引き続き海外連携校を探す

7. 廃止

- 「探究」論文集および紹介パンフレットの印刷→Web で公開・校内製本 -22 ⑤
- 千里フェスタ基調講演講師料→総合学習費等に移管
- 海外研修事前事後指導→教職員で対応
- 教員研修講師料→校内での共有や経験交流に

8. 減額

- ニューヨーク研修　生徒旅費支援 240→190 ②
- 消耗品費　50→9 ⑧
- 学習・研究用図書購入費 37→20 ⑥
- 夏季グローカル研修等の運営委託料 40→30 ⑩
- サイト作成・保守委託料　25→15 ⑩
- 非常勤事務補助員人件費　828h→768h ⑨
- 企業訪問研修謝金
- 企業/大学訪問研修旅費支援→企業のみに変更し定員減
- 調査研究旅費



9. 維持

- 運営指導委員会　謝金・交通費
- 1 年国際文化科 SGH 講演会　謝金・交通費
- 夏季グローカル研修　交通費
- 大阪大学研究合宿参加費
- 教員向け課題研究指導法の研修参加費・交通費
- 探究基礎本校独自テキストの印刷
- 探究 TA 謝金・交通費
- 探究用論文取寄せ費用
- 探究発表会　コメンテーター　謝金・交通費
- 海外研修手配実施委託料
- SGH 甲子園　生徒交通費
- 連絡協議会旅費
- 研究開発実践報告書の印刷と発送
- 研修企画等打合せ旅費

10. 新規・増額

- SGH 高校生フォーラム生徒旅費（2 名参加できるように）
- 追跡調査用はがき費用（4，５年次の報告に必要）
- 報告会案内用郵券（広報の強化）